

ICT業界における 水戦略：

ウォーター・スチュワードシップの
取り組みを始めるためのステップ

共同制作：



Responsible Business Alliance

Advancing Sustainability Globally





この報告書について

本報告書は、Alliance for Water Stewardship (AWS) と Responsible Business Alliance (RBA) によって作成された報告書の第2弾です。AWSとRBAは、マイクロ・エレクトロニクスのサプライチェーンを有するICT企業や他企業の間で、水に対する認識を高め、活動を促すため、共同で取り組んでいます。

この取り組みは、ICTサプライチェーン全体にわたるウォーター・スチュワードシップの採用を促進するためにAppleとAWSの間で交わされた複数年にわたるパートナーシップによって実現したものです。

AWSについて

Alliance for Water Stewardshipは、企業、NGOおよび公的機関で構成されたグローバル会員による共同体です。AWS会員は、優れたウォーター・スチュワードシップのパフォーマンスを促し、認め、讃える、水の持続可能な利用のための普遍的な枠組みであるウォーター・スチュワードシップ国際規格（または AWS 規格）の採用と普及を通じて、地域の水資源の持続可能性に貢献しています。

AWSは、Scottish Charitable Incorporated Organisation (SCIO) (SC045894) として登録されています。。

AWSの詳細については、A4ws.orgをご覧ください。

RBAについて

Responsible Business Allianceは、エレクトロニクス、小売、自動車、玩具などの企業で構成される非営利団体で、グローバルサプライチェーンのインパクトを受ける世界中の労働者とコミュニティの権利および幸福の支援に取り組んでいます。RBAは、RBAのミッションとバリューである責任あるグローバルなエレクトロニクス・サプライチェーンの達成に向けてメンバーを支援し、活動を促進するために必要な幅広い視点と専門知識を収集するため、労働者、政府、市民社会、投資家、学術研究機関との対話や共同事業を定期的に行っています。

RBAの詳細については、responsiblebusiness.orgをご覧ください。

はじめに

水は地域社会、ICTやマイクロ・エレクトロニクス業界を含む企業にとって、基盤的な資源です。しかし、水は非常に希少な資源でもあり、人や環境が利用できる水は地球上にある全水量のわずか1%未満しかありません(図表1)。水ストレスのリスクがある地域が地理的に拡大し、その深刻さも増していることから、従来どおりのビジネスの進め方がもはや取り得る選択肢とならないことは明らかです。また、気候変動に伴う洪水や干ばつなどの異常気象の発生が増加する中、将来に向けたレジリエンスを構築するため、企業が水課題への取り組みを今すぐ開始する重要性が高まっています。

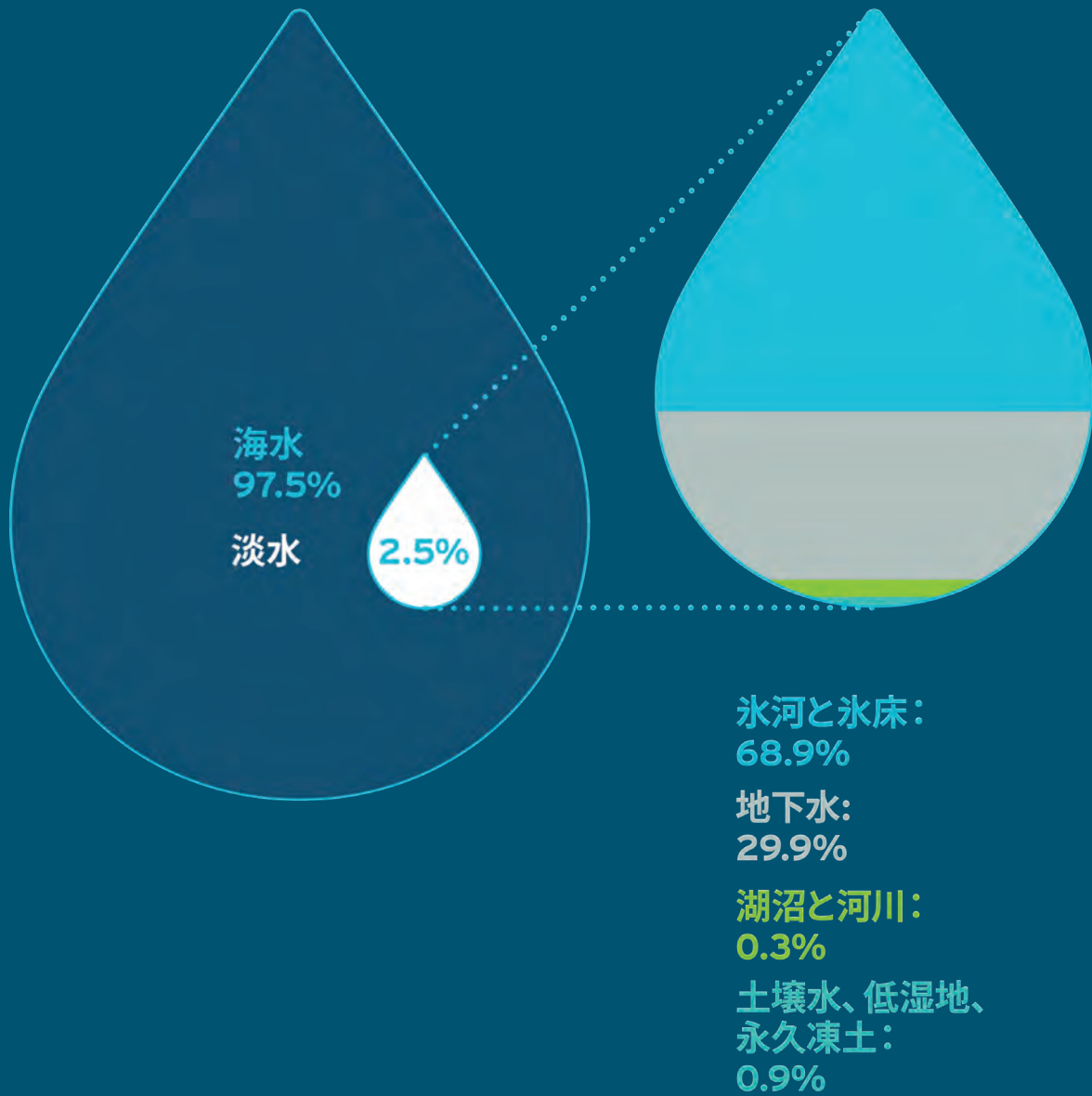
一連の報告書の第1弾である「ICT業界における水リスク¹」では、ICT業界全体にわたって水が果たす重要な役割を検証し、水リスクのさまざまな側面に関するデータとインサイトを共有し、ICT業界がこの共有する課題に協同して対応する機会を特定しています。

一方、本報告書では、ICT業界における水関連リスクを特定することで、企業がウォーター・スチュワードシップを採用するのは何故か、という理由の提示に加え、自社事業やサプライチェーンにおけるこれらのリスク認識への対応において企業は何ができるのか、という点に焦点を当てています。

本報告書では、はじめに共有する水課題への対応を模索する企業のために、ICTコミュニティが直面する潜在的な水関連リスクと機会についての概要を示します。第2章では、企業がウォーター・スチュワードシップを採用するために推奨される活動を概説し、水がサステナビリティ活動の他の側面とどのように関係しうるのかを説明しています。第3章では、これらの取り組みが業界内で既に広く使われているツールにどのように反映されているかについて紹介します。最後に、ウォーター・スチュワードシップの取り組みを始めようとする、または進めようとする企業に対する推奨事項を提示します。

1. <https://a4ws.org/water-risk-in-the-ict-sector/>

図表1：地球上の淡水量の内訳



出典：Shiklomanov, Igor A. (1998). 'World water resources: a new appraisal and assessment for the 21st century.'

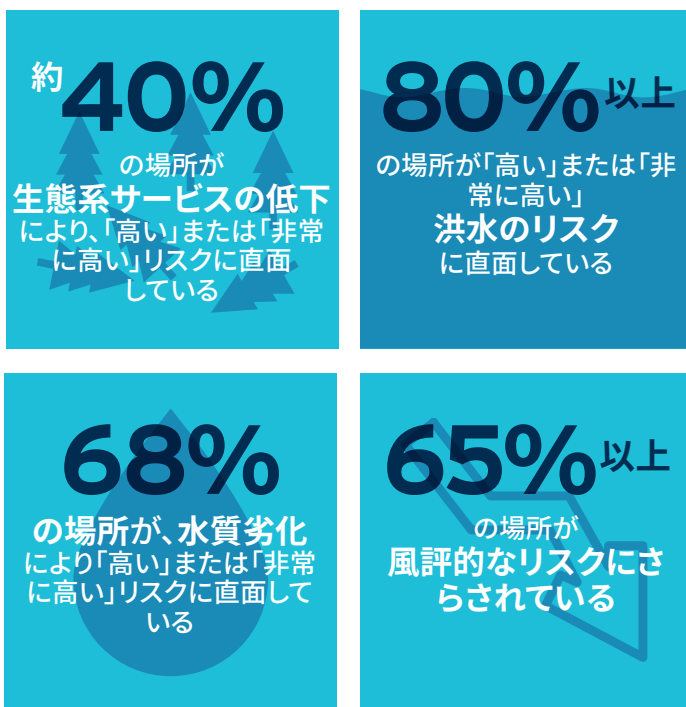
入手先：<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000112671>

第1章：

ICTにおけるウォーター・ スチュワードシップの事例

Alliance for Water Stewardship (AWS)とResponsible Business Alliance (RBA)は、世界自然保護基金 (WWF) と共同で、マイクロ・エレクトロニクス・サプライチェーンの全てのTierの水リスク評価を実施しました。RBAはICTおよびマイクロ・エレクトロニクス業界の会員とそのサプライヤーから集約された、3,300施設の匿名の地理データを提供しました。次いで、WWFのWater Risk Filter²を使用して、世界中のこれらのサイトにおける水リスクの種類を調査しました。

Water Risk Filterにより、流域全体の水リスク（立地によってサイトが直面する可能性のある水リスク）を知ることができます。流域全体のリスクは、物理的な水リスク（水不足、洪水、水質、生態系サービスの状態）、風評的な水リスク、規制上の水リスクで構成されます（図表2参照）。



図表2：ICT業界全体にわたる水リスク

しかし、水は地域的な状況に強く依存しており、これらの数字は全体の一部を語っているに過ぎません。調達拠点が異なれば、地域の状況により、異なる種類の水リスクがより支配的になる可能性があります。例えば、低地のデルタ地帯に位置している一部の調達拠点では、気候変動による海面上昇に伴って洪水に対する脆弱性が高まっています。水リスクへの対応は、地域の状況を理解した上で、より大きな全体像を検討する必要があります。水に関して言えば、万能の対応策というものはないのです。

ICT調達拠点の多くは、主要な河川流域の下流に位置しています。そのため、サプライヤーは上流における他の水利用者の活動の影響を受けることになり、さらに複雑な要素を抱えることとなります。水リスクは連鎖する特徴があるため、水課題への対応は、サプライヤー1社による自社サイトでの活動だけではなく、上流または下流のステークホルダーと協力して解決策を講じる必要があります。

さらに、外部の水の状況は、流域における水の利用可能性や水質、水の管理方法によって左右されるため、調達拠点によってその状況も大きく異なる可能性があります。このような外部の状況と、企業内部での水の使用方法が組み合わさることで、企業がどのように水に影響を与え、水に依存するのか、その過程に大きな影響を及ぼす可能性があります。そのため、内部的な水の管理活動は、流域が直面する、より広範な水課題に対処する上では、限定的な効果しか期待できません。例えば、効率化の施策や適切な化学物質管理プロセスなどの内部的な活動では、気候が引き起こす自然災害や他の水利用者との相互依存を本質的に含んだ、より広範な流域の課題を解決することは難しいでしょう。そこで必要となるのが、ウォーター・スチュワードシップなのです。

ウォーター・スチュワードシップのアプローチでは、複雑な水課題に取り組むためにはサイトの内部と外部の両方での活動が不可欠である、という認識を前提としています。流域で生じる共有する水課題は、個々の企業体の責任ではなく、協同での対応が不可欠であるという事実認識に基づいています。これらの概念は、「社会的、文化的に平等で、環境的に持続可能であり、経済的にもベネフィットのある水の利用が、サイトと流域の両方を基盤とする活動を包括したステークホルダー参加型プロセスを通じて達成されること」というAWSのウォーター・スチュワードシップの定義に盛り込まれています。

ICT業界が水関連の外部課題に直面する背景には、次のような要因による影響が考えられます：

上流側の流域課題

例：農業や森林伐採など

水質に関連する都市域の動向

例：下水処理インフラや不透水性の路面に起因する洪水、水インフラの保守管理や計画の問題など。



キーメッセージ：

- 水はあらゆるICT企業のサステナビリティ戦略において不可欠な要素です
- 水に及ぼす影響と水への依存を認識して対応することは、事業の継続性を守り、将来のレジリエンスを担保するために不可欠です
- 企業が水リスクにさらされる程度は、その事業の水への依存度と外部の状況によって異なります
- 通常、社内の水管理は、サイト内の水課題にしか対処していません。他の水利用者や気候変動などの外的要因によって影響を受ける可能性のある、より広範な課題の解決に役立つウォーター・スチュワードシップが必要となります
- ウォーター・スチュワードシップには、サイト内外の活動ならびに、他者と協力する機会を模索することが含まれており、サイト内外のリスクを軽減し、水の影響に対するビジネスのレジリエンスを向上させることができます
- 水に関する活動を事業投資計画として成立させるためには、コスト評価のみでは不十分です。価値の枠組みを広げ、単なる価格測定にとどまらず、事業継続やサプライチェーンの回復力に対する水の本質的な価値を理解する必要があります

ICT業界における水関連のリスクに関するより詳細な情報については、一連の報告書の第1弾である a4ws.org/water-risk-in-the-ict-sector をご覧ください

水 + 気候変動

「気候変動がオオカミならば、水はオオカミの牙である」という例えがあります。

世界の多くの地域で洪水と干ばつがともに激しさを増しており、現在では、気候変動が及ぼす影響は水を介した被害が最も深刻であると広く認識されています。さらに、ICTサプライチェーンの拠点の多くは、主要な河川流域の下流にある海拔の低いデルタ地帯に位置していることも、前回の報告書からわかっています。そのため、海面上昇や、その結果生じる塩水や淡水に関連する課題（例えば、地下水の塩分濃度の上昇など）に対して特に脆弱な状況に置かれています。このように水と気候は相互に関連しているにもかかわらず、これまでの気候に関する議題の多くは、エネルギーと排出量削減対策に焦点が当てられてきました。

2030年に向けて、気候変動という緊急事態に対処し、国連の持続可能な開発目標（SDGs）に向けて大きく前進しなければならないという切迫感がこれまで以上に高まる中、企業は、水と気候に関する活動をいかに上手く結びつけ、社内リソースに対して競合する需要を減らし、プラスのインパクトを最大化するかを検討することが必要となるでしょう。例えば、サプライチェーン上の水の見えにくい側面について理解を深め、そのプロセスに気候シナリオに基づく予測を織り込むことで、企業は事業のレジリエンス向上の計画の一環として、将来の水シナリオに対する積極的な対応を始められるようになります。

気候、水、生物多様性、社会的な影響のすべてが非常に密接に絡み合っていることを踏まえ、企業はこれらのテーマに関する考え方にシステム・アプローチを取り入れることを検討する必要があります。これには、事業全体にわたる様々な意思決定レベルを結びつけ、すべてのテーマにわたる意思決定が意図しない結果を引き起こさないように検討することが不可欠です。

例えば、太陽エネルギーが確実に利用できる場所に工場を立地することは、エネルギーの観点からは理にかなっていますが、そのような場所は水不足の高まりにも直面している可能性があるため、意思決定の際には水も検討しなければなりません。それとは逆に、水のリサイクルや再利用を増やすために水に主眼をおいた意思決定をする場合、サイトでのエネルギー需要が増加し、気候やエネルギーの目標に影響を及ぼす可能性があります。例えば、新しい工場の立地選定の際には、地域の利用可能な水量との比較による水需要の理解だけでなく、エネルギーへの影響、地域の生物多様性、自宅と職場の両方で清潔で安全な飲料水にアクセスするためのさまざまな労働者のニーズも組み入れることができます。このような総合的なアプローチをとることで、企業が意思決定する際に持続可能性のさまざまな側面から最適な情報を得ることができ、バリューチェーン全体にわたるより強力な活動計画を立てることができ、これにより、絶えず変化する気候や水のリスクの中で、サプライチェーンのレジリエンスを高めることができます。



第2章：

水リスクに対してICT企業 ができることは何か

企業ごとにウォーター・スチュワードシップの取り組みは異なりますが、水へのアプローチを構築するために使用できる共通の要素がいくつかあります（図表3を参照）。この章では、ICT企業がウォーター・スチュワードシップの取り組みを開始し、推進するためのいくつかのポイントを紹介します。このアプローチは、サプライチェーンにおける水への取り組みを模索しているグローバルなブランドや、操業上の水リスクと事業のレジリエンス向上に取り組むための強力なアプローチを実証しようとするサプライチェーン上の企業にも等しく利用できます。なお、企業がこのようなプロセスを進める際に役立つ、有用なツールやリソースが既に数多く存在しており、この章でそれらを紹介しています。

ウォーター・スチュワードシップは継続的な改善プロセスであるため、ここでは検討すべき要素の全体像を示すことを意図しています。同時に、各活動は継続的な改善プロセスの一環として洗練され、拡大される可能性があることを前提としています。企業内、サプライチェーン、そして事業展開する地域において、水に関する企業内の能力と賛同が高まるにつれ、企業の水に関する意欲や活動も高まっていきます。

企業内からの賛同

水をビジネス戦略に組み込むためには、企業内の賛同、能力開発、トレーニングがあらゆる取り組みの基盤となります。事業継続とサプライチェーンのレジリエンスにおける水の重要性が広く理解され始めている一方で、水は他のサステナビリティのテーマの影に隠れてしまうことも少なくありません。そのため、水に関する取り組みを進めようとするサステナビリティの専門家は、社内の賛同を得るために時間をかける必要があるでしょう。そのためには、経営幹部と協力して広い意味での水の価値を理解してもらうことや、社内のデータや経験を活用して水のインパクトや依存関係を示すのも良いでしょう。気候変動がサプライチェーン内の水リスクをさらに増幅させることを考えると、気候が引き起こす水へのインパクトを伝えることも重要です。企業が気候変動に関する目標を設定する傾向が強まる中、水は戦略的に重視すべき重要な分野として理解されなければなりません。

水に関する社内およびサプライチェーン内の幅広い能力開発に必要なリソースを優先的に配分してもらうためには、経営幹部のサポートが不可欠です。そのためには、既存のデータや新たに収集したデータを用いて、企業のバリューチェーンのどこで、どのように水が関わっているかを事業全体で評価し、ウォーター・スチュワードシップが現在の事業のレジリエンスにとって不可欠であり、長期的な戦略にインパクトを及ぼす可能性があることを外部と協力して立証する必要があります。水に関する議論を企業内のリスクやレジリエンスに対する既存の計画の枠組みに組み込むことで、経営幹部の賛同を取り付ける機会が生まれます。また、水関連の課題に取り組むことで、炭素目標の達成、生物多様性の保護、地域社会の健全性向上など、他のサステナビリティ目標とのコベネフィットがどのように得られるのかという情報を提示することも有用です。

企業内での理解と参画が進むにつれ、企業が検討すべき次の重要なステップはトレーニングとなるはずですが。

また、この段階にある企業は、同業他社や外部の専門家に話を聞き、類似したビジネスや類似した地域で、他の企業がどのようにウォーター・スチュワードシップに取り組んできたかについてのインサイトを集めるのもよいかもしれません。

主要なリソース：

- **Embedding Project**は、企業が持続可能性を事業や意思決定に全体に根付かせることを支援するために活動しています。このミッションの一環として同団体では、社内の賛同を得るのに役立つツールとして社内向けの企画書の作成を支援するリソースを提供しています。詳しくはembeddingproject.org/resources/storytellingをご覧ください。
- **Alliance for Water Stewardship**が提供するウォーター・スチュワードシップ・トレーニング・プログラムのほか、このステップをサポートする複数の組織からのツールやリソースも利用できます。詳しくはa4ws.org/trainingをご覧ください。

水のリスクと機会への理解を深める

ウォーター・スチュワードシップ戦略の中心は、確固たる水リスク評価です。水リスク評価を行うことで、ビジネスが水にどのような影響を及ぼし、どのように依存しているのか、またそれが現在および将来のビジネスの操業にどのような影響を及ぼす可能性があるのかを理解することが可能となります。では、水リスク評価とはどのようなものなのでしょうか。

まずは、所有するすべての事業所とサプライヤーの所在地をリストアップすることから始めます。次に、このリストを用いて各所在地の流域の水リスクを評価します。これらの流域の水リスク評価をオンラインで実施可能なツールはいくつかあり、世界自然保護基金（WWF）のWater Risk Filter³や世界資源研究所（WRI）のAquaduct⁴、さらには持可能な開発のための世界経済人会議（WBCSD）のIndia Water Tool⁵など特定の地域に特化したツールもあります。これら3つのツールとそれらを補完する機能については、[Right Tool for the Job: tools and approaches for companies and investors to assess water risks and shared water challenges](https://www.right-tool-for-the-job.com/)⁶で詳細に解説されています。

この流域レベルの水リスク評価により、企業は外部の水の状況をグローバルに把握できるようになります。前回の報告書であるICT業界における水リスク⁷では、世界中の3,300以上のICT事業所が展開されている場所の流域レベルの水リスク評価について共有しました。図表4は、そのアウトプットの1つです。

3. <https://waterriskfilter.org>

4. <https://www.wri.org/aquaduct>

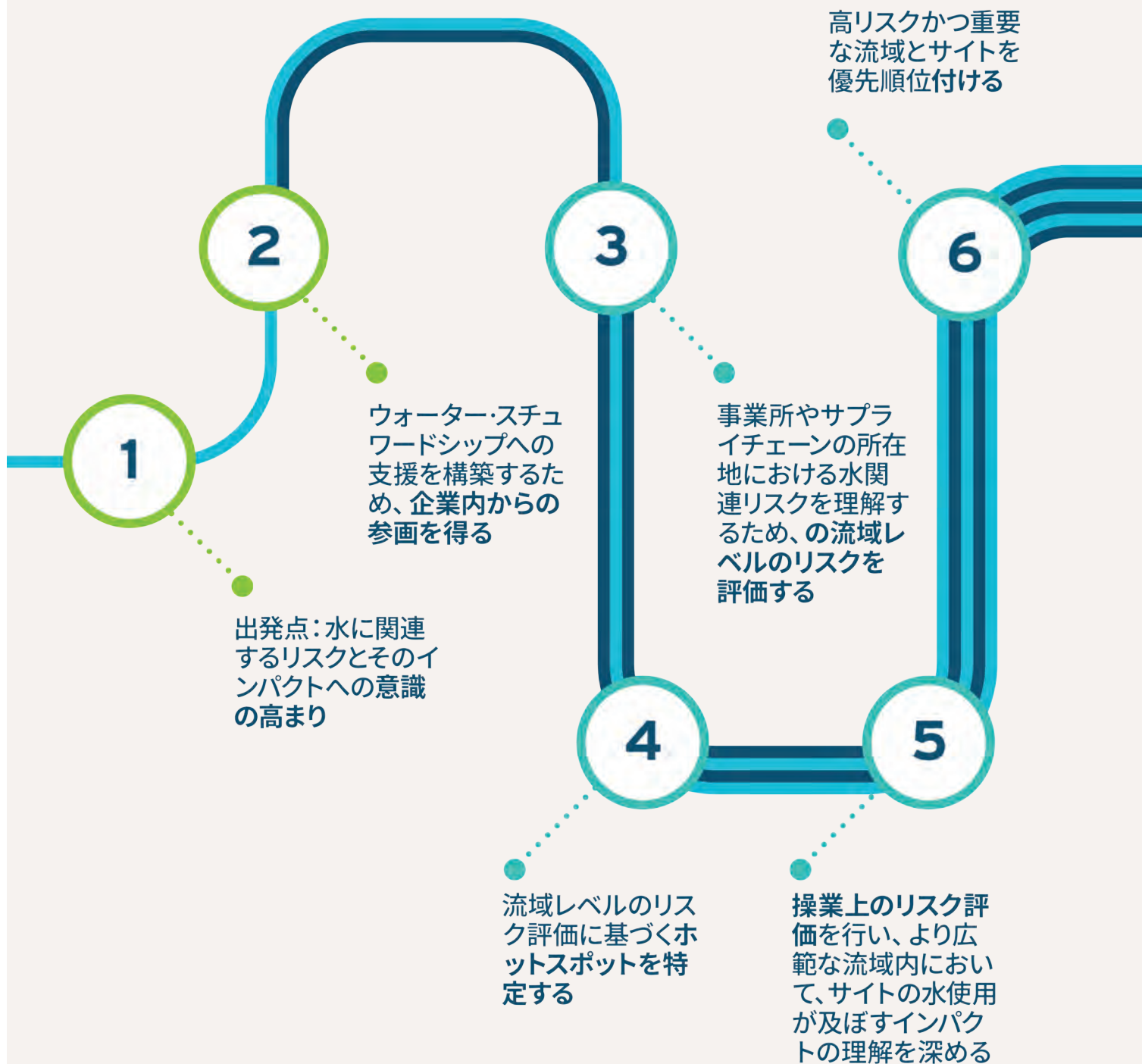
5. <https://www.indiawatertool.in/index.html>

6. https://d2ouvy59p0dq6k.cloudfront.net/downloads/right_tool_for_the_job_1.pdf

7. <https://a4ws.org/water-risk-in-the-ict-sector/>

図表3：

ウォーター・スチュワードシップの進め方



それぞれの特定されたホットスポットに対して、水課題に取り組むための最適な活動計画を策定する

7

水に関する社会的、環境的、財務的な課題を解決し、より広範な事業戦略につなげる水戦略を策定する

8

9

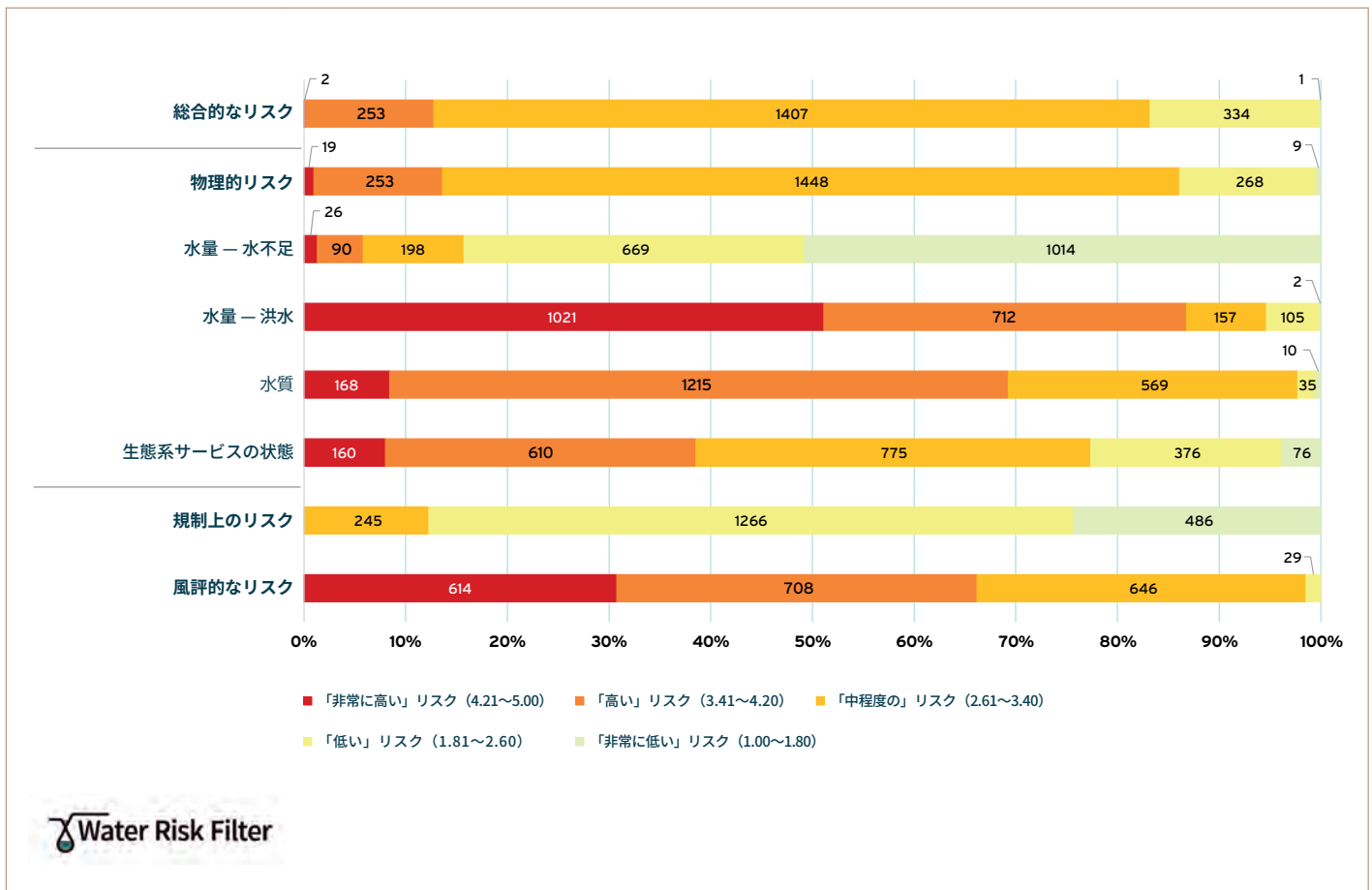
水戦略に対する進捗をモニタリングするための目標を設定する

10

共有する水課題に取り組むための協同活動に参画し、外部組織と連携する

11

継続的な改善のために、進捗状況を評価し、学びを活用する



図表4：WWF Water Risk Filterを用いた3,300以上のICTサプライチェーン施設の水リスク評価（2021年）

この流域レベルのリスク評価により、企業は、外部環境における水リスクに基づき、自社の水リスクのホットスポットがどこにあるのかを知る最初の手がかりを得ることができます。

このような外部環境の水リスク評価に続いて、企業は自社の事業内容（またはサプライヤーの事業内容）が外部の状況とどのように相互作用しているかを把握する必要があります。これは操業上のリスク評価を追加することで可能となるもので、サイト固有の活動に基づき、サイトが特定の所在地でどのように水を使用し、どのような影響を及ぼしているかを把握できるようになります。企業はすべてのサイトの操業上のリスクを網羅的に評価することも、特定の所在地を優先してさらなるデータの収集を実施することも、何れかの選択も可能です。

流域レベルのリスクと操業上のリスクの両方の評価を行った後、企業は特定したサイトに優先順位をつけるという重要なステップへと進みます。優先順位付けの際には、流域リスク評価の見直しと、水リスクの高い場所に立地するサイトの集積地（自社が保有する事業所とサプライヤーの所在地）の特定も行います。ここで得た情報と、それぞれの自社サイトやサプライヤー拠点の財務的価値に関するデータを組み合わせることで、最も重大な水リスクに直面しているサイトだけでなく、事業にとって最も重要な価値を持つサイトでの活動も優先させることができるようになります。これは、水戦略の中で提案した活動に対して、企業内での賛同と牽引力を確実に得られるようにするために不可欠なステップです。この評価、レビュー、優先順位付けのプロセスは、最も緊急性が高く、重要な場所から開始し、企業のウォーター・スケジュールの取り組みが成熟するにつれて拡大しながら、継続的に実施していく必要があります。

これまで、5つの重要なステップについて説明してきました。

1. 企業内からの参画を促し、水への取り組みの賛同を得る
2. バリューチェーン全体にわたる水課題を特定するため、流域レベルのリスク評価を実施する
3. 流域レベルのリスク評価に基づき、水リスクのホットスポットを特定する
4. 各ホットスポットの操業実態と外部環境における水の状況との相互作用を網羅的に評価する
5. 総合的なリスクや企業にとっての価値をもとに、サイトまたは集積地に優先順位を付ける

主要なリソース：

以下のリソースは、企業が事業やサプライチェーン全体の水リスクを調査、特定、評価する際に役立つことができるツールです。

- WWFのWater Risk Filter (waterriskfilter.org)
- WRIのAqueduct (wri.org/aqueduct)
- WBCSDのIndia Water Tool (indiawatertool.in/index.html)

水に関する活動計画の策定

優先順位の高い所在地を特定したら、それぞれの所在地で詳細な調査を行い、既存のサイトでの活動内容や水関連のテーマに取り組んでいる可能性のある地域の他のステークホルダーを特定するなど、より詳細なレベルで地域の状況を把握することができます。これにより、グローバルな調査結果を感覚的に検証し、今後の水に関連する活動のための優れた基盤となりうる既存の活動を特定する機会が得られます。

こうして、それぞれの所在地に最適な活動計画を策定し、企業の戦略目標に繋げることができます。これらの活動計画はバリューチェーン全体にわたる水への依存度、機会、影響の多様性、そして世界各地の水課題の極めて文脈的な特性を反映しており、当然ながらそれぞれの場所で異なるものになります。活動計画は、企業の長期的なビジョンや目標という広い文脈の中で検討され、水に対して戦略的にリソースを投入する際の判断材料とされるべきものです。

AWS規格は、この活動計画の策定プロセスの指針となるように設計されたフレームワークを提供しています。それは5つのステップを中心に構成されたプロセスです。

1. 情報の収集と理解：

共有する水課題と水リスク、そのインパクトと機会を理解するためにサイトのデータを収集します。

2. コミットメントと計画策定：

サイトは責任ある水資源の管理者（ウォーター・スチュワード）となることを約束し、ステップ1で収集したデータを使用してウォーター・スチュワードシップ計画を策定します。

3. 実施：

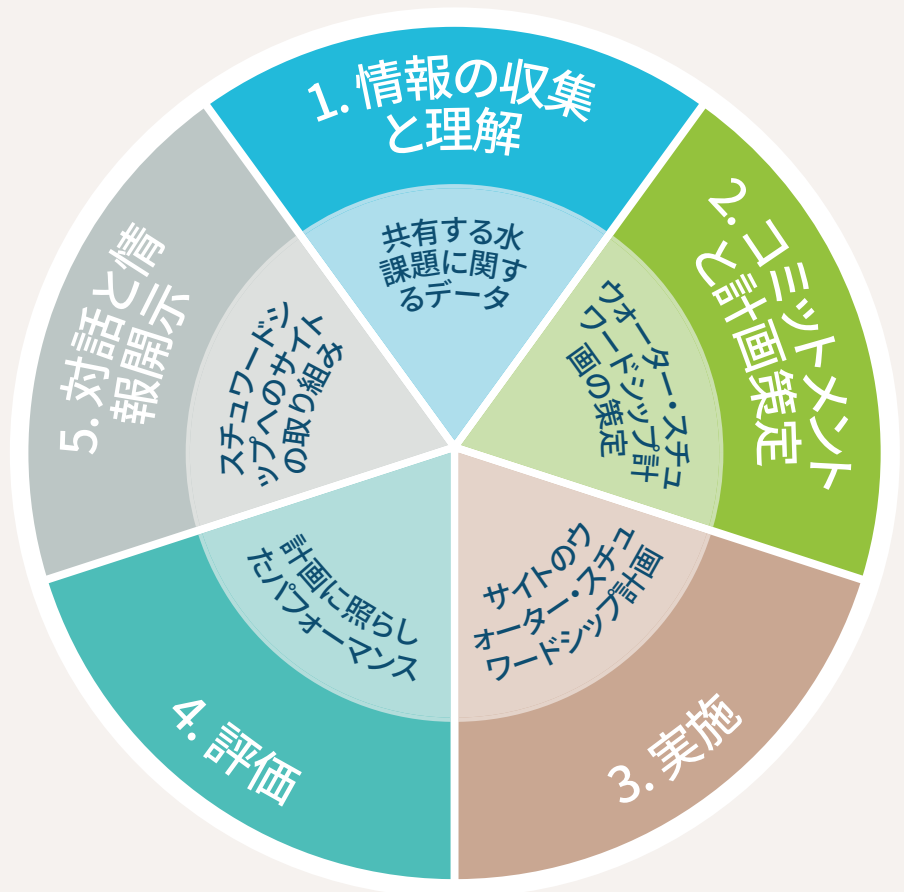
サイトのウォーター・スチュワードシップ計画を実施し、サイト内やより大きな流域へより良いインパクトをもたらします。

4. 評価：

サイトは結果から学び、将来の取り組みに活かせるよう、ウォーター・スチュワードシップ計画に対するパフォーマンスを評価します。

5. 対話と情報開示：

サイトは透明性と説明責任を果たすため、ウォーター・スチュワードシップについて対話し、サイトによるスチュワードシップの取り組みに関する情報を開示します。



AWS規格および付属する一般的なガイダンスはa4ws.orgから無料でダウンロードすることができます。また、AWS Tools Hub (tools.a4ws.org)では、ウォーター・スチュワードシップの取り組みの一環としてこの規格を利用しているサイトを支援するためのツールやリソースを提供しています。ウォーター・スチュワードシップは継続的な改善のプロセスであり、本規格に準拠して活動を行うサイトは、ウォーター・スチュワードシップ活動について信頼性を確保するために認証を取得することができます。

戦略の策定

水戦略の策定にあたっては、事業全体にわたる影響と依存関係の両方を含む水リスクの多面的な特性についての正しい理解にもとづいていることが極めて重要です。これはつまり、水の環境的・社会的要素を戦略に組み入れるだけでなく、財務的なマテリアリティも含めて、水のあらゆる側面を網羅したリスクと機会の全体像を提示する必要があるということです。

水戦略は、企業の社会的責任（CSR）の領域を超えて、このテーマを中核的なビジネスの目的と操業に落とし込み、事業戦略と結び付けることが必要不可欠です。なぜそれが重要なのでしょうか。水はビジネスの操業に欠かせないものであり、このレベルの意思決定にまで昇華させることで価値創造の機会が生まれます。気候変動によって水資源への負荷がますます高まる中、事業の一部（例えば設計）やサステナビリティに関する1つのテーマ（例えばエネルギー）で下した決定が、意図せず水に有害な影響を及ぼさないよう、水に関するあらゆる側面を十分に理解することは、ビジネス上の不可欠な要件となります。

水戦略を策定する際に、このような水の全体像を検討し、社内の優先事項に反映させることにより、戦略を事業全体に確実に浸透させることにも繋がります。このことは、戦略を運用する上で重要であり、事業にとって戦略的に重要であるバリューチェーン上の水関連のホットスポットを活動の対象とすることで、活動に対するビジネス上の投資効果が最も大きい領域にリソースを集中させることを意味します。

水戦略の策定や、より広範な事業戦略の中に水を組込むことを検討する場合、企業は他の重点分野と水が相互に関連する特性を反映させることも可能です。気候戦略やエネルギー戦略は水への依存度が高いため、これらを調整する機会にもなります。例えば、洪水と干ばつは気候変動に関連する2つの重大な影響であるため、流域に対する理解を深めることで、企業とそのサプライチェーンが気候変動による水リスクに備えるためのより良い助けとなります。

世界各地のさまざまな水の状況を反映し、水の影響と依存関係の幅広く深い認識の下、強固で全社的な水戦略を策定することは、ウォーター・スチュワードシップの取り組みにおいて極めて重要なステップとなります。また、そうすることで企業の操業の状況やバリューチェーン全体の中で意味のある目標を策定するためのさらなる取り組みの土台を築くことになります。

主要なリソース：

Putting Water Strategy into Contextは、WWFによって作成されたガイドであり、戦略設定のために従うべきフレームワークを提供するものです。詳しくは waterriskfilter.org/explore/waterriskreports をご覧ください

水に関する目標設定

目標はあらゆる戦略において重要な役割を果たしますが、水に関しては、企業独自の活動をモニタリングし、追跡するための目標を設定することが必要不可欠です。これらの目標には、その企業独自の水への依存度や、企業（またはそのサプライヤー）が事業を展開する所在地におけるより広範な水の状況を反映したものでなければなりません。このことは、企業によって目標が異なることを意味しており、同業他社が設定する目標とは大きく異なる可能性があります。

先進的な企業においては、効率化や汚染防止といった画一的な目標から、全社的な目標やパーパスに沿ったより多面的かつ具体的な目標の導入へと移行し、ビジネスと水とのさまざまな相互作用に対応しています。そのような企業は水のリスクと機会は自社の操業だけでなく、サプライチェーンにも存在することを認識しており、目標にもそのような意識が反映されています。これはまた、水に関する目標を他の活動分野と結び付ける機会にもなり、気候変動に対するレジリエンス、社会的責任、生物多様性の保護など、サステナビリティのさまざまな側面との連携を促進します。



従って、目標は、企業内外の情報源から収集した多層的な情報、自社事業とサプライチェーン活動の双方に関する情報、およびビジネスが生産において依存している所在地それぞれに固有の水の状況を反映した、強固な戦略策定プロセスによって導き出されるべきであるということ認識することが重要です。

優れた水に関する目標は、次のようなものです

- ビジネスを展開するそれぞれの地域において、企業が最も意味のある活動に集中できること
- ビジネスが水に及ぼしうるインパクトや水に依存しうる多様な様態を反映したものであること
- 包括的な戦略策定プロセスによって導き出されたものであること

水の目標設定は複雑な試みが伴います。このことが活動の障壁になってはなりません。むしろ、企業はウォーター・スチュワードシップが継続的なプロセスであることを認識した上で、上述のプロセスに従って活動を開始すべきです。私たちが世界中で直面している水課題の深刻を増している今、企業はまず取り組みを開始し、強固な基盤の上に取り組みを成長させることが不可欠です。

水に関する目標設定は複雑な側面があることを考慮し、企業の取り組みを支援するためのガイダンスやリソースを提供するための取り組みがいくつか進行中です（以下の主要なリソースを参照）。

主要なリソース：

Putting Water Strategy into ContextはWWFによって作成されたガイドであり、戦略設定のために従うべきフレームワークを提供するものです。これは、最新のベストプラクティスの事例に基づく包括的なアプローチを共有することを目的に、同組織の戦略設定のリソースに基づいて構築されたものです。詳しくは[waterriskfilter.org/explore/waterriskreports](https://www.waterriskfilter.org/explore/waterriskreports)をご覧ください

CEO Water Mandate、CDP、The Nature Conservancy、UNEP-DHI、World Resources Institute、WWFの共著によるSetting Site Water Targets Informed by Catchment Contextガイドでは、目標設定に関する追加情報を提供しています。詳細についてはceowatermandate.org/site-targets-guideをご覧ください。

協同活動、対話と連携

ウォーター・スチュワードシップ活動の重要な要素として、協同活動は頻繁に言及されますが、それはこの手法が、基本的に水利用者が協力して共有する水課題に取り組むためのものであるためです。しかし、協同活動はさまざまな規模で行われる可能性があり、活動の種類も多岐にわたります。複数年にわたって流域レベルで活動する複数パートナーによる大規模なプロジェクトもあれば、水を使用するサイトのグループが協力して地域の流域やサブ流域で共有する水課題に取り組む小規模なプロジェクトもあります。どちらも、水リスクの状況に応じて取り組むのであれば、非常に有効な活動規模です。ウォーター・スチュワードシップの取り組みを進めている企業は、世界のさまざまな地域やバリューチェーンのさまざまな段階で、さまざまな規模の協同活動に参画していると考えられます。

特にICTのようにサプライチェーンが高度に相互連携している業界では、業界規模の協同活動や連携もウォーター・スチュワードシップの推進の一翼を担っています。企業は、サプライヤーが互いに競い合うような要求を避けつつ、水に関する活動の迅速な拡大のために、従うべき一連の共有された方法論、要求事項、プロセスに従って連携する絶好の機会があります。機会に関するいくつかの初期的な推奨事項については、一連の報告書の第1弾であるICT業界における水リスク⁸に概説されています。

ICT業界以外にも連携の機会は存在します。ICTバリューチェーンに存在する水関連の課題や機会の多くは、他の業界にも共通するものであるため、互いに学び合い、共通の解決策を模索できる可能性があります。

8. <https://a4ws.org/water-risk-in-the-ict-sector/>

キーメッセージ：

- 目標は、地域の状況に根ざした戦略から構築する必要があります
- 継続的な改善はウォーター・スチュワードシップの中核的な要素であるため、企業はすべてに対する答えを待ってから行動するよりも、まずは着手し、時間をかけて意欲と活動を進化させる方が良い結果を生みます
- 優先順位の決定、アイデアの共有、グッドプラクティスを開発するために企業の内部および外部からの賛同や参画の獲得が、強力な水戦略の構築に貢献します
- 最初の水リスク評価は、企業内の優先事項や事業戦略とのつながりを踏まえて、続く優先順位付けの基盤を築くためのものです
- 水戦略は水の影響と依存関係の多面的な特性を正しく理解し、地域の状況に根ざしたものにする必要があります
- 環境的、社会的、財政的な要素をすべて検討した上で、取り組む所在地の優先順位を決める必要があります
- 水戦略は、水、気候、生物多様性、持続可能な開発目標（SDGs）に向けた進捗が相互に関連していることを認識することによってより強固なものとなります

第3章：

ICT業界からの視点

既存のアプローチや取り組みとのつながり

ICTバリューチェーンの全体にわたって、水の活動に積極的に取り組む企業の動きが活発になるにつれ、この高まりつつある意識は、業界全体に拡張可能な効果的なアプローチを求める業界の意欲をかきたてています。水と他の多くのサステナビリティや社会的なテーマとの関連性を考えると、これはICT業界やそのパートナーにとって、共有する目標を達成するために既に進行中の取り組みを土台とする機会を提供するものでもあります。ICTのサプライチェーンは相互に密接に結びついているため、共通の目標や方法論に基づく業界の連携が求められますが、これはウォーター・スチュワードシップのアプローチに適していると言えます。

共有する水課題に取り組むために業界の総力を結集しようとする場合、業界はまず、ICT業界で使用するために採用、または適用可能な、既に利用可能なツールやリソース、方法論を特定することが不可欠です。これを行わないと、水関連のデータや活動のために複数の要請を受けるサプライヤーにとって、取り組みが重複したり、さらなる複雑さが生じたりする危険性があります。仮に既存のツールとのギャップが確認された場合、世界中でウォーター・スチュワードシップの取り組みを促進するために、ICT業界は業界全体、ひいては業界を超えて利用可能な新しいアプローチの開発に重要な役割を果たすことができます。

企業のウォーター・スチュワードシップの取り組みを支援するためのツールは、既に幅広く存在しており、本報告書で概説して

いるように、取り組みのあらゆる段階でサポートを提供しています。グローバルな水リスク評価は、AqueductまたはWater Risk Filterを使って実施することができ、トレーニングやテーマ別のガイダンスはAlliance for Water Stewardship、CEO Water Mandate、WWFなどの組織が提供しています。これらの方法論は戦略策定やその後の目標設定を支援し、情報開示のメカニズムとも連携しています。

ICT業界では、上記で概説したツールに加え、ウォーター・スチュワードシップを推進するための優れた取り組みを可能にし、データ収集とサプライヤー参画のための入口を提供する業界特有のツールもいくつか存在します。RBAは、業界がサプライチェーン上の水に取り組みに参画するための道筋を提供しており、より高度なウォーター・スチュワードシップ活動の基盤を構築する既存のツールをすでに用意しています。

これらの団体の支援により、企業はそれぞれのウォーター・スチュワードシップの道のりにおいて重要なマイルストーンを既に達成しています。それぞれの団体のツールやリソースは単独でも大きな力を発揮しますが、複数のツールやリソースを連携させることでテーマ横断的な強みを発揮し、気候変動と水のバランスを考慮した、より全体的な視点を養うとともに、企業が利用可能な技術的ツールを最大限に活用することができます（6ページの「水＋気候変動」の欄内も参照ください）。

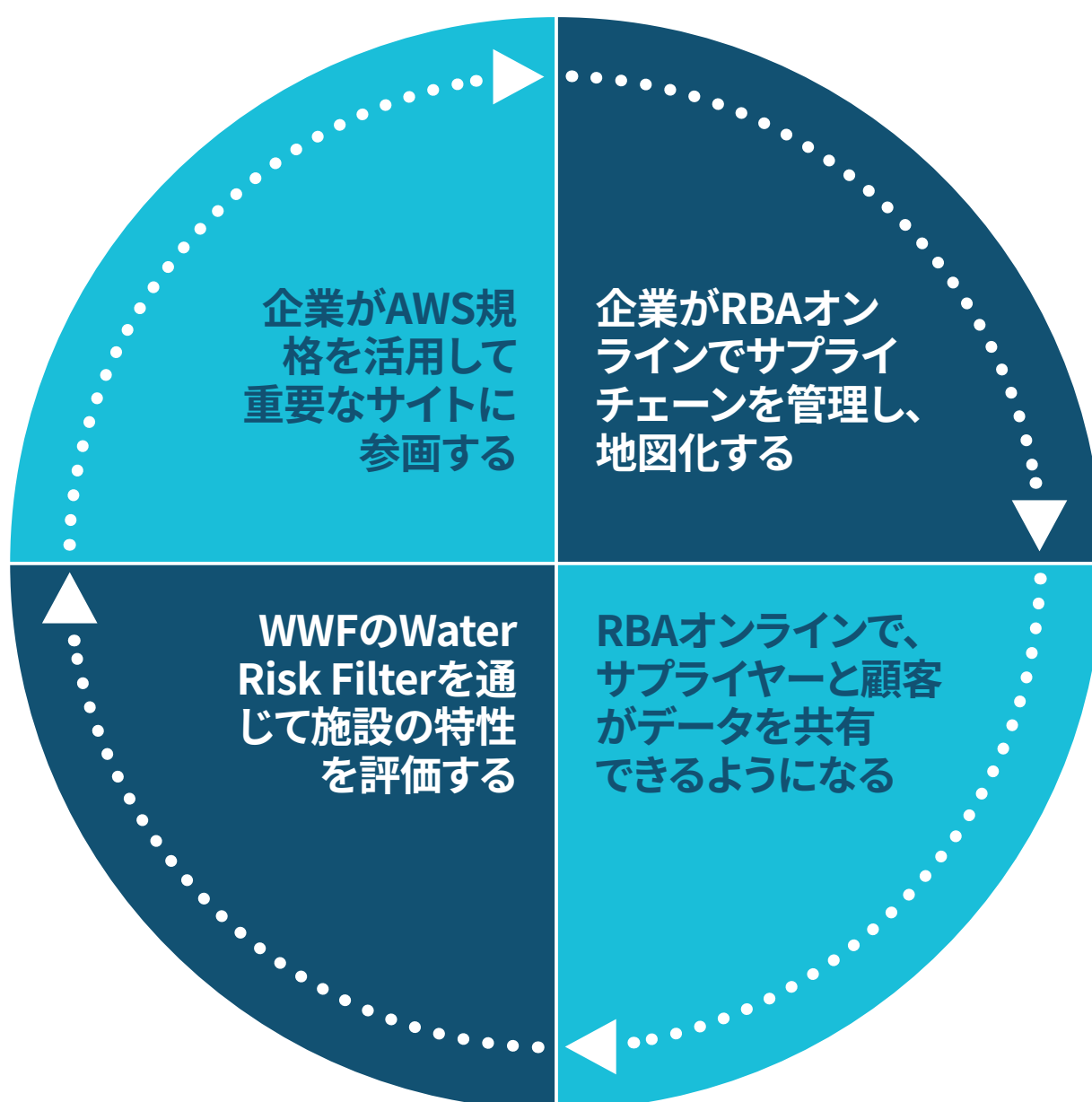


連携の機会

AWS、RBA、WWFは、業界を超えた連携が最大のインパクトを生む可能性を認識しており、互いのコミュニケーションを向上させ、ユーザーにプログラムの成長と成熟を促すような発展的な道筋を作るため、統一的な仕様のリソースを設計するための調整を始めています。この調整には、既存のリソースやプラットフォームをより円滑に連携して一致させることで、異なるツールに関わるサプライヤーの負担を軽減し、企業が必要とする規模のインパクトを達成できるように支援する機会を模索することも含まれます。

図5は、AWS、RBA、WWFの3つの組織がそれぞれの持つリソースと専門知識を最大限に活用することで、この潜在的なテーマ間の整合性についてのヒントを示したものであり、各組織の主要なツールを利用している企業がその価値を最大限に高めることができるようにするものです。どんな取り組みの道のりもそうであるように、このプロセスは循環的であり、より深い参画と高いパフォーマンスを通じて、時間の経過とともに成長を促すものです。

このアプローチにより、企業は、バリューチェーン全体における水の影響と依存関係をしっかりと理解した上で、状況に応じた水戦略の策定に役立つデータを効率的に収集することができるようになります。各企業の水に関する取り組みがさらに発展すれば、その経験を活用して、付加価値を高めるさらなる機会を特定し、業界全体で他の企業と協力することができるようになります。



図表5：連携の機会

機会と次のステップ

水に関する課題への取り組みは、世界中の多くの企業にとって重要な課題となっています。気候変動、生物多様性の回復と保護の必要性、私たちの原動力である国連の持続可能な開発目標（SDGs）に向けた推進力はすべて、共有する水課題に対する協同的な責任をますます際立たせています。ICT業界は、気候変動や社会的課題に対する既存の取り組みを基盤に、連携のための既存の道筋を活かしながら、この機会に対応することができる立場にあります。

ウォーター・スチュワードシップの取り組みを始めようとする、または進めようとする企業は、水に対するビジネスの考え方を変える必要があり、内部的な水管理のアプローチから、ビジネス全体にわたる複雑な水の依存関係を認識して、優先順位の高い所在地それぞれで地域の水の状況の理解を併用するアプローチに移行する必要があります。

リスク評価手法や標準規格のスキームから、このテーマでグローバルに活動を進めようとする企業体に向けたガイドまで、ICT企業がこのアプローチをとるのを支援するために必要なツールはすでに多く存在しています。ウォーター・スチュワードシップのアプローチは、最初は複雑に見えるかも

しませんが、ICT企業にとって最も重要なことは、まずは始めてみることで、そこから積み重ねを続けることです。また、水課題は、一つの企業体だけでは対処できない共有の責任であることを認識することも重要です。

世界にはすでに様々な業界にわたって多くの多国籍企業がウォーター・スチュワードシップを実践しており、こうした企業が参画する大規模なウォーター・スチュワードシップのコミュニティが存在しています。このコミュニティは、活動を始めたばかりの企業への支援やサポートを提供し、あるいはウォーター・スチュワードシップをさらに進めるため、これまでの経験や専門知識を活用するなど、水に関する取り組みを連携して進める用意があり、それを歓迎しています。また、こうした既存の活動から、世界中にある企業の自社拠点やサプライチェーンの拠点でウォーター・スチュワードシップを実践する方法について豊富な知識を提供しています。どの組織もすべての答えを持っているわけではありませんが、その機運は高まっており、ICT企業が独自のスキルや専門知識を活用して、世界の水危機への取り組みに重要な役割を果たせる機会が大きく広がっています。

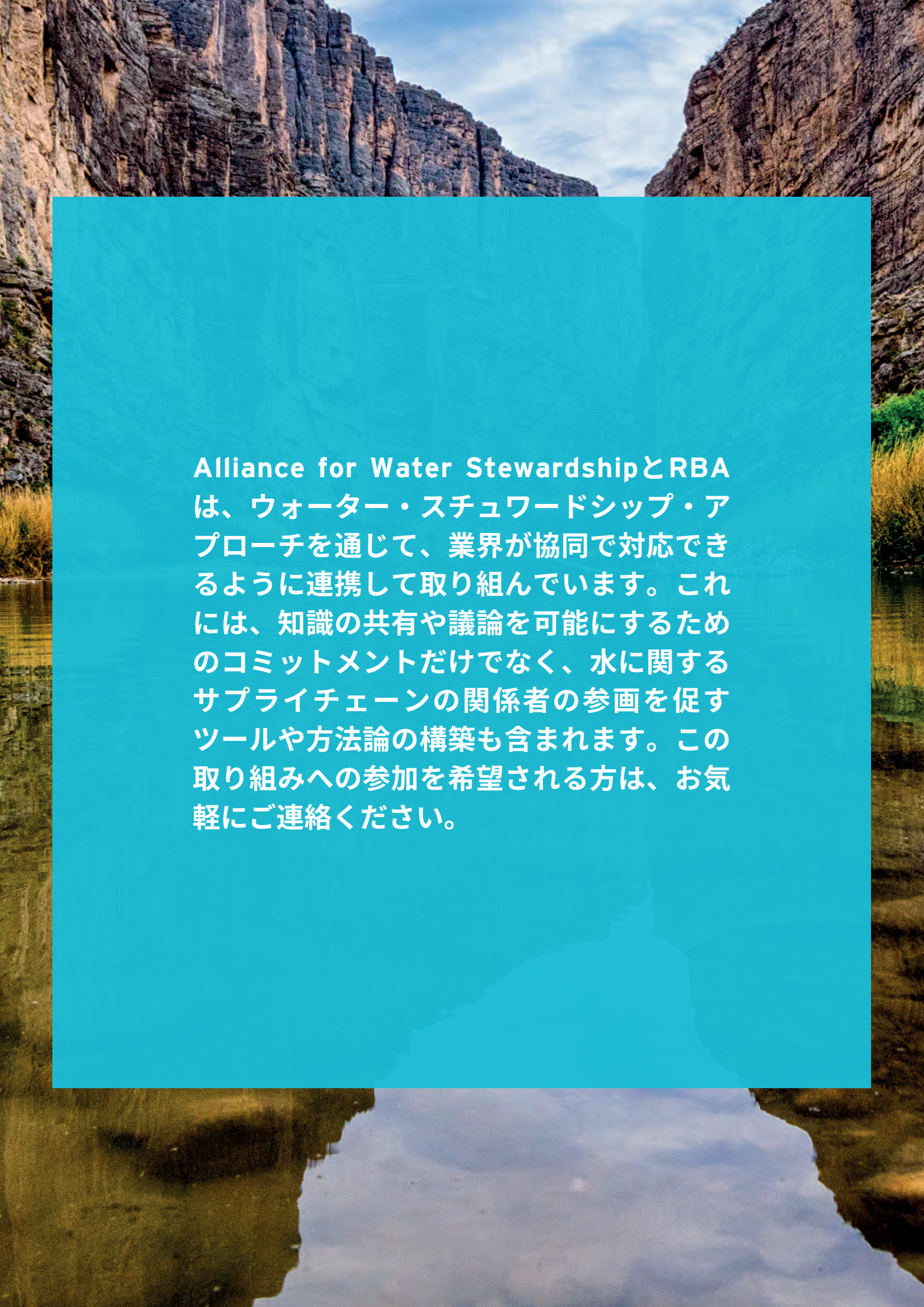
ウォーター・スチュワードシップの取り組みを進めたい企業にとって、以下の内容が有用な次のステップとなります。

- 水の取り組みの必要性について関心をかき立て、賛同を得るため、ビジネスに対する水の重要性の議論を企業内で開始する
- [Water Risk Filter](https://waterriskfilter.org)⁹や[Aqueduct](https://www.wri.org/aqueduct)¹⁰のようなツールを活用して水リスク評価を始めましょう
- 水は共有資源であり、水課題に取り組むためには連携したアプローチが必要であるため、ICT業界の仲間に声をかけ、互いに学び合きましょう
- 第2章で紹介しているリソースを参照し、戦略策定と目標設定についてさらに学んでみましょう
- [Alliance for Water Stewardship \(AWS\) 規格](https://a4ws.org/the-aws-standard-2-0/)¹¹について詳しく確認し、サイトや流域レベルでの活動の指針としてAWS規格がどのように役立つかを確認しましょう
- ウォーター・スチュワードシップを実施するサプライヤーなどの負担を軽減するため、業界全体で共有するソリューションを実践する機会を特定しましょう
- ICTにおいてウォーター・スチュワードシップを推進し、業界連携を促進するため、AWSおよびRBAに参画しましょう

9. <https://waterriskfilter.org>

10. <https://www.wri.org/aqueduct>

11. <https://a4ws.org/the-aws-standard-2-0/>



Alliance for Water StewardshipとRBA
は、ウォーター・スチュワードシップ・ア
プローチを通じて、業界が協同で対応でき
るように連携して取り組んでいます。これ
には、知識の共有や議論を可能にするため
のコミットメントだけでなく、水に関する
サプライチェーンの関係者の参画を促す
ツールや方法論の構築も含まれます。この
取り組みへの参加を希望される方は、お気
軽にご連絡ください。

著者

ALLIANCE FOR WATER STEWARDSHIP
SARAH WADE

THE RESPONSIBLE BUSINESS ALLIANCE
DAN REID

この報告書の執筆にあたり、この報告書に貴重な
時間と洞察を与えてくれたRylan Dobson氏
(WWFインターナショナル)に感謝します。

Alliance for Water Stewardship (SCIO)
2 Quality Street North Berwick
Scotland, EH39 4HW

Email: info@a4ws.org

著作権: © 2022 Alliance for Water Stewardship

本書の複製は、出典を明記することを条件に、著作権者の書面
による事前の許可なく、教育目的またはその他の非営利目的で
複製することを許諾します。

著作権者の事前の書面による許可なく、再販またはその他の商
業目的で 本書を複製することは禁じられています。